

福祉事業の先駆者 佐々木五三郎

佐々木五三郎は、青森県における社会福祉事業の開拓者であり、また東北きつての大規模社会福祉施設「弘前愛成園」の基礎をきずいた人である。

現代は、「福祉の時代」ともいわれている。社会事業は制度化され、社会保障は国が責任をもって行うしくみができている。老人は少額<sup>しょうがく</sup>で医療が受けられ、母子家庭には援助の手がさしのべられ、両親をなくした不幸な子どもは、それぞれの施設にはいり、その日の食にこまることもない。

しかし、佐々木五三郎が成長した明治初年には、そのような福祉事業はおろか、福祉施設など一つもなかった。不幸にして両親をうしなひ、孤児となったら最後、その子は自分で食をさがすか、飢え死にするしか方法がなかった。

そのような時代に、佐々木五三郎は、世の無理解とたたかいながら、不幸な子ども達を育てるために、それこそ血の出るような奮闘を続けた。五三郎は多くの孤児達を、わが子と同じ愛情をもって、その成長に自分の命をかけた。社会福祉など、だれ一人として考えもしなかった時代のことだけに、五三郎の行為は崇高<sup>たうこう</sup>であり、いつそうの感動をよぶ。

佐々木五三郎は一八六八年（明治元）六月十日、弘前富田紙漉町（現文化幼稚園付近という）に、新蔵の三男として生まれた。

新蔵の父——五三郎の祖父は、津軽藩医師佐々木秀庵である。新蔵の兄で五三郎の伯父は、津軽蘭学の始祖で、種痘普及の恩人として知られる佐々木元俊である。また言論界の先駆者として知られ、日本新聞社社長の陸羯南は、五三郎の二從兄弟にあたる。

五三郎は、生後三日目に母と死別した。十歳のときには、父新蔵が他界している。このように、早く両親と別れた境遇が、後年、不幸な孤児たちへの愛情を、はぐくんだと見ることができるだろう。

母に死別した五三郎は、近所の成田藤之丞家にあずけられた。成田家では乳児が死亡し乳が余っていたので、五三郎はもらい乳で成長した。そのとき籍も成田家に入れ、成田五三郎と名乗った。成田家は精米業を営んでいたが、五三郎はその仕事を手伝い、水車小屋の米つき場で働きながら東奥義塾に学び、一八八四年（明治十七）に卒業した。

五三郎の父新蔵は、富田紙漉町で、製紙、製陶、製瓦などの工場を経営していたが、明治十年新蔵の死と共にその事業もさびれてしまった。

五三郎が二十四歳のとき、佐々木家の当主元四郎が死亡し、跡とりがなかったために、佐々木家は絶家となった。五三郎は佐々木家の絶えることを悲しんで、養家の成田家の許しを受けて離籍し、佐々木家に帰った。彼は長兄元四郎の跡をうけて、本町一丁目の薬種商を継いだ。

本町一丁目の佐々木薬店は、弘前市内初めての西洋造りの建て物で『赤格子』と呼ばれた。当時、近所にはコダ屋、ヒノ屋、カナ屋、タ

ケ屋、それに赤格子と五軒の薬屋があった。

赤格子では、元俊が蘭学を学んだせいで、漢方でない製薬もやった。胃腸薬キンデルサン、皮膚病薬硫灰炎など専売特許の薬も作って、広く県内に売った。ことに皮膚病の薬は『佐々木のくさいコ』といわれ、有名だったという。

ところが一八九七年（明治三十）、五三郎の叔父玄貞げんていが炭鉱事業に失敗した。玄貞は下北半島猿ヶ森で石炭を採掘していたが、輸送問題で行きづまり、倒産したのである。そのあおりを受けて、五三郎の佐々木薬店も倒産、彼は無一物になってしまった。

叔父のおかげで無一物になった五三郎であったが、彼はくじけなかった。この苦難に負けてなるものかと、もう一度やりなおす決心をした。彼は新婚一年たらずの妻を実家にあずけ、ひとり身になって、なりふりかまわず身を粉にして働いた。世の辛酸をつぶさになめながら、佐々木薬店再興に必死になった。

こうして苦労を続けること数年、一九〇一年（明治三十四）に至って、五三郎は再び本町一丁目の元の場所に、薬種商の店を持つことができた。

五三郎の女婿じよせいで、元弘前愛成園理事長の三浦昌武氏は、この時代の五三郎について、「この七年間の苦闘こそは、五三郎にとって得がたい体験であり、これだけの人生の試練を経たればこそ、この後のあらゆる苦難にも耐え得て、社会と時勢と四つに取り組み、半世紀の間、青

森島の貧童孤児救済事業に挺身し、不幸な子の父として、その聖なる仕事を続け得たのでありましょう。」と言っているが、苦闘のなかで自分を鍛えていった五三郎の偉大さを見習うべきであろう。

一九〇二年（明治三十五）、大凶作が本県をおそった。有名な天明の飢饉ききんを上まわるといわれた凶作である。当時のありさまを五三郎は、「官民その救護に勞せりといえども、草根木皮そうこんもくひなおその飢えを医するに足らず。貧童孤児路頭はいかいに徘徊して食を求むるものようやく多く、その窮状心あるものをして、涙を催さしむ」と書いている。

この年は青森歩兵第五連隊の八甲田山雪中行軍遭難事件もあったが、天候不順がつづいた。稲が開花しても日照がなく、冷害による凶作だった。県内で上北、下北、三戸郡など皆無作で、一粒の米もとれなかった。小学校では退学者が続出、欠席者も多く、休校する学校もあった。米のねだんが高くなり、貧窮者が町や村にあふれた。緊急勅令きんきょくちよくれいが出て、税を納める資力のないものは、三年以内の年賦延納などの措置がとられたほどである。

弘前の町をさまよい歩く、気の毒な貧しい子らや孤児たちに、五三郎は心を動かされた。五三郎は母の愛を知らずに育った。幼いときに父も失った。自分が愛情に飢えて育ったためであろうか、他人の不幸に思いやりがあつて、じっとしてられないあせりを覚えた。

五三郎が孤児救済に踏みきった直接のきっかけは、岡山孤児院の創設者石井十次が弘前にやって来て、孤児救済を力説したのを聞いたことだった。

石井十次は一八六五年（慶応元）宮城県士族の子として生まれ、一九一四年（大正三）、五十年の生涯を終えるまで、孤児の父として、わが国の民間社会福祉事業の開拓者だった。石井が創設した岡山孤児院は「孤児の友なり、盲啞もうあの友なり、病者の友なり、貧者の友なり、寡婦かふの友なり、囚人しゅうじんの友なり」の目標をかかげてそれを実践し、資金募集のため、孤児院の青年九名で音楽隊を組織し、全国を回り歩いた。

一九〇〇年（明治三十三）十月、石井十次は弘前で講演をしたが、五三郎は石井の講演を感動しながら聞いた。それは彼にとって天の声にも等しいものであった。石井は五三郎より三歳年長だったが、他県人の自分と同じ世代の人が、懸命になっている姿に、五三郎は発奮した。

倒産した店をかかえて、どん底の苦闘に堪え、これを再興した社会人としての実力、自信と、まだ残っていた青年の血気が、五三郎を行動へかりたてた。一九〇二年（明治三十五）、五三郎は貧困家庭を聞いて歩き、男女七人の孤児を引きとることになった。

縁起えんぎかつぎで、記念事業の好きだった五三郎は、その年の十一月三日、当時の天皇誕生の日——天長節を創院の日とし、『東北育児院』の看板をかかげた。その院則は次の通りである。

一、薄幸なる貧童孤児を救済教養するを目的とす。

一、児童学齢に達したる時は、市立小学校に入学せしめ、さらに学業優秀なるものは、本人の希望により、高等教育を修めしむ。

一、義務教育を修養したる時は本人適當の職業を習得せしめ、独立自活の途を立てしむ。

一、年齢六歳以上たるを原則とするも、また事情やむを得ざる場合は、六歳未満にても入院せしむ。

のちに五三郎の長女テルの夫となり、五三郎の後継者となった佐々木寅次郎は、開院三ヶ月目の一九〇三年（明治三十六）一月二日に東北育児院に入っている。寅次郎は義務教育をおえたのち、東奥義塾に学び、五三郎の片腕となって事業を助け、発展させた。

五三郎の家業の薬店は続けられていたが、莫大な利益があがるわけではなかったから、東北育児院の経営は苦しかった。皇室からのご下賜金、内務省の奨励金、県や市の補助金などが院の維持費だったが、收容児がどんどんふえて、それらの資金は焼け石に水だった。篤志家の寄附もときどきあったが、商売の収益を全部つきこんでも、維持費は足りなかった。

不足を補うため、五三郎は一九〇四年（明治三十七）ごろから行商を始めた。チリ紙、ロウソク、せっけん、マッチなど売り歩くのだが、初めは收容している孤児を歩かせなかった。五三郎自身が売り歩いた。しかし、それで間にあわなくなり、やむを得ず子供たちも商売に出した。

市内を七区に分け、一週間に一度回るようにした。売れなくなると、五三郎は町かどに立って大声で孤児救済必要の演説をぶった。五三

郎の演説は熱誠にあふれ、一回の演説に「諸君よ諸君」ということばが、必ず二、三十回も飛び出した。

筆者も小学生のとき、五三郎の演説を聞いたことがある。五三郎はそのころ六十八歳だったと思うが、温顔に微笑をたたえて孤児救済をうったえた。気持ちが高揚してくると、五三郎は「諸君よ諸君」を連発し、聴衆はまた同情のこもった声援をしていた。

五三郎の演説に賛同し、同情を示して協力してくれる人もあった。しかし、なかには冷たい目を向ける人もあった。孤児たちを行商に出さなくてもいいではないか、孤児たちを働かせて食っている、といった心ない非難をする人もあった。

孤児院のおどさ

でっただ下駄げたはいて

鐘かね持ってガランガラン

弘前の人びとは、五三郎をこういってはやし立てた。五三郎は弘前の名物男になっていた。しかし、このはやしことばには、いささか嘲笑の気味も含まれていた。

だが、五三郎の信念は、少しもぐらつくことがなかった。彼はなりふりかまわず、自分の道をまっしぐらに進んだ。

五三郎、タカ夫妻は、育児院の子供たちを自分の子供と区別なくあつかった。寝小便をたれるもの、病気になったり怪我をするもの、カ

サの出るものなどが跡を断たなかった。かつばらいをやったり、しみついた放浪癖が抜けないで、手こずらせるものもあった。五三郎夫妻は、それらの子供たちに献身的に尽くした。

一九〇七年（明治四十）十二月、五三郎は行商の無理から風邪をこじらせ、急性肺炎にかかり盲腸炎も併発した。全快まで百日余りを要したが、そのため育児院の経営が困難となり、市内の篤志家に助力を求めた。毎月五銭（現在の金で百円ぐらい）寄付したものを賛助会員としたが、賛助会員は七十人ほど得られ、なかには五十銭寄付してくれる人もあった。月四十円ほどの金が集まり、ようやく育児院を維持することができた。

翌明治四十一年のことである。プレー商会という活動写真（映画のこと）の巡業隊が弘前にやって来た。ところが、どうしたことか巡業隊は弘前で解散し、映写機械と楽器一そろいが売りに出された。五三郎は育児院の維持費を、活動写真の巡回興業でかせこうと、機械一式と楽器を金二百円で買いとった。

五三郎は、東奥義塾在学中だった寅次郎に、技術を勉強させた。映写技術の習得は簡単だったが、楽器を使いこなすのに苦労した。そのころ、市内富田に安田というせんたく屋があった。安田せんたく屋は、もと近衛連隊の軍楽隊で小太鼓を打ち、安田から習ったせんたく屋の丁稚がラッパを吹いたりアコードオンを鳴らしたりして、楽隊を編成していた。寅次郎は安田せんたく屋から楽器の吹奏を習った。習つ

ては他の院児たちに伝授した。その後、バス、トロンボーン、バリトンなどの楽器も入手したが、そのたびに安田せんたく屋から習い、これをマスターした。

こうして、一九〇九年（明治四十二）から巡回が始まった。活動写真のフィルムは、実写やニュースや外国の喜劇の一卷物で、時間にして五、六分のものであった。だから全部上映しても三十分ほどで終わった。そこで楽隊の演奏で間をつなぎ、時間を引きのばした。また東北育児院の内容を幻灯にし、五三郎は事業への協力を呼びかけ演説をした。

寅次郎は巡業のため、学校へ出れないこともあった。向学心に燃える彼は、巡業のあいまに木造中学など他校で聴講したこともあった。

巡回活動写真の入場料は、おとな十銭、子供五銭ほどで、一日平均五円か六円の収入があった。うち半分が利益金だったので、育児院の経営にずいぶん役立った。

一九一三年（大正二）、青森県はまた大凶作だった。津軽地方でも皆無作の所があったが、県南地方は一層ひどかった。寅次郎ら東北育児院の六人は、そのとき野辺地を基地にして、県南各地で活動写真を上映、凶作救済事業の宣伝にあたっていた。

そして岩手県九戸郡まで巡業の足をのばした。湊村から大野村へ出かける途中のこと、映写機が四、五十キロの重さで、二十八キロメートルの道中がたいへんなので、荷馬車を頼んで積みこんだ。ところが、駁者ぎよしゃの不注意から、たばこ火がまぐさにつき、火はフィルムを入れ

た函に点火、十七種類のフィルムと映写機は、あつというまに焼けてしまった。損害は千円に及んだ。

三十人の院児の生活がかかっている映写機を失って、寅次郎たちは暗い心をいだいて弘前に帰った。しかし五三郎は少しもせめることなく、新しい生活の手だてを考えて、なお一層奮闘した。

それから四ヶ月ほどして、新しく映写機を購入した。そこで西郡鯉ヶ沢町から日本海ぞいに、山形県まで巡業した。ちょうど鶴岡まで行ったとき、皇太后陛下がなくなられ、音楽や芝居や映画などに一週間の禁止令が出た。寅次郎は毎日の収入を、二円、三円と弘前に送金していたので、手もとに一円の金も持っていなかった。活動写真は上映することができない。寅次郎ははたと困った。食うや食わずで一週間をようやく過ごした。

この経験から、五三郎は活動写真の常設館を開館することにした。一九一四年（大正三）九月、五三郎は市内山道町に『慈善館』という活動写真常設館を開いた。映画館としては弘前で最初であり、県内でも青森市に一館あるだけであった。

慈善館は『銭屋五兵衛』のフィルムで幕をあけた。つづいて『ターザン』を上映した。弘前で最初の常設館なので、市民は珍しかったが、そのわりに初めのころは不入りだった。

その一年半ほど前、寅次郎は朝陽小学校の同窓会に出席したが、そこで余興のうまい人に出会った。安井春月という靴屋であった。安井

の講釈はしろうと離れがしていた。それを思い出して、寅次郎は安井に映画の弁士（その頃の映画は音がなく、弁士という説明者がついてた）として慈善館に出てもらったが、一度に人気が出て、それから慈善館の入りもよくなった。大正四年正月の『幡随院長兵衛』、二月の『日蓮上人』などは大当たりで、慈善館は連日超満員となった。

慈善館の順調な発展によつて、五三郎の社会事業は着々と進んでいった。一九二四年（大正十三）には孤児救済の功勞で天皇杯を受けた。

一九三一年（昭和六）、創院三十年記念に『東北育兒院』を『弘前愛成園』と改称した。この間、黒石と大鰐にも映画常設館を建て、保育所、養老院を開き五三郎の信念は、形となって現れていった。

五三郎は、一九四五年（昭和二十）四月二十七日、七十八歳でなくなった。宝泉院で行われた葬儀には数百人の人びとが、悲しみの涙で香華を手向けた。明治三十五年東北育兒院創設以来、七十八歳で没するまでに養育した孤児の総数は、明治年代八十四名、大正年代六十四名、昭和年代七十三名、実に二百二十一名の多きにのぼっている。なんと偉大なことではないか。そして今も『弘前愛成園』は続けられて

く。

参考文献 三浦昌武著『佐々木五三郎』「郷土の先人を語る(2)」一九六八年（昭和四十二）弘前市立図書館

出典…弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、一七八～一八八頁